

あ と が き

政権交代による施策に対して、現在では評価する段階にはありませんが、影響は多方面にわたり、教育の世界とりわけ私学にとって、公立高等学校無償化がどのような状況を生むのか不明確であります。

ところで、本学園では昨年度中等教育研究部を立ち上げ、本年度も研究部員を二人選出しました。星城中学校からは、国語科の三笥教諭、星城高等学校からは英語科の城戸教諭であります。二人は火・水・金・土曜日は星城大学において、授業計画の立案から分析までに力を注ぎ、月曜日と木曜日は学校現場で授業実践を行いました。また、学校と研究部を繋ぐとともに授業研究に携わる先生として、中学校から石部主幹、高等学校から橋本教頭が加わり、アラニ部長、深谷顧問と共に週一回部会が持たれました。

本年度は、二人の研究部員がコミュニケーションやグループ学習等で共通する部分がありましたが、両者とも今まで一斉講義形式の授業の経験しかないとのことで、どのようになるのか興味を抱いておりました。一学期の授業では、生徒相互に学び合う状況がある一方、その中に入れない生徒もいる状況が顕著にあらわれているように感じました。その後、グループ学習の運営の仕方、生徒の指名の在り方、机間巡視の仕方等工夫されたと思います。二人とも実践研究をする中で、生徒一人ひとりが学ぶとは、一人ひとりが理解できるとは、という課題の解決の過程において、数多くのことを学ばれたと思います。

私は今年度新たに感じたことがあります。中等教育研究部が中心になって行っている授業研究・分析という研究方法を通して授業実践の改革が星城中学校・高等学校の中で、認知されてきていると感じました。それは、研究授業への参観教員、授業分析会や校内研修としての発表会への参加教員が次第に増えてきたと思うからです。

今後、個人の教育力向上と相まって、学校全体の教育力、教員の資質の向上により、生徒に付加価値をきちんとつけられる学校であってほしいと考えております。まだまだ授業研究という実践改善を通して生徒のためによりよい授業づくりには時間がかかるとは思います。引き続き二人の研究員を始めとして諸先生方の絶ゆまぬ努力を期待しております。

平成 22 年 3 月 16 日

名古屋石田学園
法人本部長 石田直城